



わくわく《総会》のご案内

主催：食農わくわくネットわーく北海道



春の日差しがまぶしい季節となりました。

『食農わくわくネットわーく北海道』では、2015年度の総会と講演会、交流会を次のとおり開催します。

お友達もお誘い合わせのうえ、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

【と き】 2015年5月23日(土) 13:30～17:00 (受付13:00～)

【ところ】 豊水会館(旧豊水小学校) 2階和室

(札幌市中央区南8条西2丁目 TEL:011-511-0655) 駐車場あり(無料)

※地下鉄 東豊線「豊水すすきの駅」6番出口 徒歩3分

南北線「中島公園駅」1番出口 徒歩5分

【参加費】 会員：無料 非会員：500円

【プログラム】

13:00～ 【第1部】 受付開始

13:30～14:00 2015年度総会

14:00～15:30 講演会「TPPとわが国農業を巡る情勢について ～和の経済の視点から～」

講師：三野 耕治 さん (元農林水産省・札幌大学客員教授)

♪ 自称、百姓応援団として、多くの民間団体の活動を支援しています！

著書「にっぽんっていいね！ 和の経済入門」 ※添付の書評をご覧ください。

小野高速印刷(株) Tel.079-222-5372又はamazonなどで購入できます。

15:30～15:45 休憩・準備

15:45～16:45 交流会、試食(北海道産の食材を使った料理など)

参加者PRタイムなど

16:45～17:00 閉会、後片付け

(会場移動)

17:30～19:00 【第2部】懇親会 (要申込。3千円程度予定、会場は当日お知らせ)



♪交流会では、皆さんからの差し入れ、大歓迎です。是非PRしてください！

~~~~~ わくわく《総会》参加申込書 ~~~~~

下記に記載の上、事務局までFAX・郵送・Eメールでお申込みください。

なお、準備の都合がありますので、5月16日(土)までに、お申込みを！

あて先：札幌市北区北8条西3丁目 札幌エルプラザ2階 市民活動サポートセンター No.105

FAX 011-728-7280 (No.105)

Eメール wakuwakunet.h@gmail.com

- | | |
|-------|--------------------------|
| ①お名前 | (会員 ・ 非会員)※どちらかに○印を |
| ②ご住所 | ③お電話 |
| ④Eメール | ⑤【第2部】懇親会の参加希望 (有 ・ 無) |

書評：三野耕治著『につぼんっていいね！ 和の経済入門』ブックウェイ

元農林水産省農林水産技術会議事務局長 西尾 敏彦

農林水産省時代から親しくおつき合いしてきた三野耕治さんが、このほど著書をおおやけにされた。一読して感嘆したのは、三野さんの桁はずれの知識欲と、それを支える行動力である。農家であれ、非農家であれ、こと農業の関係者でこれだと思う人がいると、すぐ訪ね、現場で教えを請うている。長く地方農政にたずさわっていたから、こうした機会には恵まれていたことはたしかだが、それにしてもたいへんな行動力である。役人の肩書きをはずし、時間外や休日に私人として訪ねたそうだが、よほど辞を低くし、真摯な姿勢でおつき合いしなければ、ここまでの人間関係は築けなかっただろう。本書はその多様な交友関係、訪問体験をもとに、農村と都市の関係を「和の経済」という視点で捉えた彼の思索の航跡とあってよいだろう。

まず本書の前半では、彼が現場に足を運んで面談した人びとの活動実態と行動哲学が語られる。山村や離島で活躍する酪農家、無農薬でおいしい野菜・ミカン・リンゴを栽培する園芸農家、ブドウの新品種づくりに燃える農業育種家、国内唯一の碁石茶の生産農家、アレルギー患者に安心安全の米を届けようと奮闘するお医者さんと米屋さん、農村と都市の架け橋にとB&B（簡易宿泊施設）を営むご夫婦、胃を病む人でもおいしく食べられる料理づくりにうち込む名シェフ、お年寄りに生きがいを提供する農産物直売所の代表、などなど。

これら登場人物に共通するのは、自然の摂理を信じ、目先の変化に振り回されることなく、どんなに時間がかかろうと、ひたすら信ずる道を突き進む生き方である。自然を愛し、そこで営まれる農業を愛し、農業を中心に展開される資源循環を大切にしていこうという生き方といってもよい。そこには生産者は消費者を、消費者は生産者を、相互に信頼を寄せ合う相互補助関係が成立している。“につぼんっていいね！”と、三野さんが感じたのはそこだろう。読者はこの本を読むことによって、いま農村でなにが起こっているかを知ることができる。

考えてみると、最近のように都市と農村が隔絶される以前の農家・消費者関係はこれに近い状況にあった。それが今日の乾ききった農家・消費者関係になってしまったのは、戦後の近代工業の発達で都市に人口が集中し、それを支える農業技術・流通経済の社会が育つようになってからのことである。本書に登場した人びととの出会いのなかから三野さんが「和の経済」に行き着いたのは、そんな農業と社会の行き方に疑問をもち、そこからの脱却を願ってのことだろう。本書の後半の章は、その思索遍歴のノートとあってよいだろう。

もうひとつ、研究者OBのわたしが興味をもったのは、全国的には認められなくとも一部の農家の間で重用される民間農法・伝承農法などを、三野さんがよく記録していることである。麦飯石、機能水、酵素農法、炭埋農法、低周波農法、寒試し、などなど。三野さんはこうしたみえにくい技術にまで光を当て、掘り起こしている。残念ながら、わたしにはよく理解できないものが多いが、だからといって無意味というつもりはない。こうした在野の技術のなかから、画期的な技術革新が生まれた例は過去にいくつもある。現場こそが技術革新の発信基地だからだ。注意して見守っていききたい。